

彼方 「かなた」

校長通信
H24.11.28
Vol.25

【夢に向かって】

「将来の夢は？」「志望理由は？」

と質問しながら、三年生との会食で、将来の夢や進路希望についての話を聴いています。

生徒の多くは、なりたい職業を

書きます。自分の生き方や考え方を

書く生徒もいます。残念ながら「先生、夢ないんです。」と言って困った様子の生徒もいます。でもそういう生徒でも必ず自分の考えを書いてくれます。私にとつてはとても楽しい時間です。

生徒もいろいろな職業を書いてくれますが、職業には、五千通り以上もの職種があるそうです。将来その中から一つだけ選び出さねばならないのです。（中には複数の仕事を掛け持つ人も当然います。）

ところが、厚生労働省の統計では、大学を卒業して会社に就職した人のうち三分の一（数十万人）が、三年以内に会社を辞めています。仕方なく辞めなければならぬ人、他から引き抜かれて転職する人、自分で起業する人、辞める理由はいろいろあるかもしれませんが、前向きな理由ならよいのですが、「こんなはずじゃなかった。」「こんなことをしたくてこの会社に入ったんじゃない。」「もっと自分にあつた職業が別にあるはず。」という思いで辞めていく人も少なくないのです。いずれにしても三年以内で辞めてしまふ若者の数の多さにはビックリです。「石の上にも三



年！」という話しは通じなくなってきたのでしようか。耐性がなく、打たれ弱かったり、根気が続かなくなったりしているのでしょうか。

そんな中で二人のスポーツ界に関わる人の話を聞くことができました。一人は、宇津木妙子さんです。

日本ソフトボールチームを率いて、オリンピックで二大会連続メダル（銀、銅）を獲得した監督として有名な方です。もう一人は、メジャーリーグの審判やパリーグの審判として活躍した平林岳さんです。

宇津木さんの講演の演題は、『夢の実現』。努力は裏切らない。平林さんの演題は「チャレンジ！夢をあきらめない。サムライ審判の挑戦！」でした。どちらも自分の夢を求めて、前向きに取り組むお話でした。特に宇津木さんのお話では「選手時代、やらされていたり、受け身でいたときは、まったくうまくいかなかったが、ユニチカに入ってから、自分でソフトボールの勉強をするようになった。それからは、結果もついてきた。自分から努力するようになった。その積み重ねが大切で、絶対に無駄にはならない。」ということでした。

平林さんのお話で心に残ったのは「一度は諦めかけたメジャーリーグの審判に再挑戦し、日本人としての良さや自分の長所に目を向けて、最大限の努力を払い、自分でできることを続けることでマイナーリーグまでいくことができた。年齢制限でメジャーにはいけなかったが、現在は後進の指導に当たっている。夢を実現させるには、絶対に諦めない強い気持ちと自分のやっていることを大好きになることが秘訣！」ということでした。

バザーで呼び出した三令さんの夢は、小さい頃から憧れていた歌手デビューでした。それを実現したのも、お二人の話に出てきた「努力は裏切らない」ということと「夢をあきらめない」ということだったのかもしれない。

「どうせ自分なんか・・・」「絶対に無理！」「そんなのできるわけない」これらは、夢を持っていない子ども達から聞かれる代表的な言葉です。「そんなことないよ！」という周りの言葉ではどうにもならないネガティブな思いです。二十歳までに十四万六千語の嫌な言葉、ネガティブな言葉を（一日平均二十回）浴びせかけ続けられる子ども達の心にはメンタルブ

ロックという（「どうせ・・・」「・・・無理」という感情を引き起こす）壁が作られるのです。その感情を打ち破り、夢への強い思いをつくる秘訣があるそうです。ノーベル賞もうわさされるほどの最先端の遺伝子工学の研究をされている筑波大学名誉教授の村上和雄先生は次のようにおっしゃっています。

「人間は、自分の持つ能力の数%しか使っていません。もし眠ったままの遺伝子のスイッチをONにすることができれば多くの可能性を生み出すことができます。いくつかの実験でわかったことは、そのスイッチを入れる方法のひとつが、**笑**

顔を作ることや前向きな言動をとることです。」笑いが病気を治すのも、思いの強さが夢を現実になら近づけていくのも、遺伝子のスイッチがONになった状態で行動するからなのです。

